

年頭所感

岸 良一

さる歳を送りとり歳を迎えた。鶏鳴曉を告ぐ。輝かしい昭和32年元旦に当り、何とかして平和な豊かな年であれかしと祈る。

さて終戦後既に10年、食糧自給態勢の確立と農家経営の合理化はわが国農政に一大転換をもたらし、畜産を強く農業経営内に採り入れてゆかなければならないと言うことが全く常識化されるに至り、これに伴って乳牛頭数も既に50万頭を算し、戦前の3倍に増加し、牛乳生産量も約4倍に伸びている。最近発表された下期農業観測によって見ても牛乳生産工業部門の発展に伴って食生活は日を追って改善の度を深める傾向から見ても今後日本人の畜産食品に対する需要は一路増加して行くであろうから酪農天気図は先ず上々というところであろう。

又一方昨年北海道における冷害は性懲りもない米作就念に一大鉄槌を下し農業内における酪農の占める役割が如何に重大であるかを大然と訓え、今や酪農は全く世の脚光を浴びつつ発展の一途にあるわけである。然し日本は国際連合にも加盟して名実共に国際経済の渦中に入っていくのだからウツカリして酪農経営改善に対する努力を忘れていると思わぬ破綻を招かぬでもない。

農林省では32年度予算に乳製品の需給調整措置として7,000万円を大蔵省に要求中と聞く。勿論これだけで問題が解決されるわけでもあるまいが、将来の酪

農基金制度の前提として需給調整の実現を望むものである。乳価の安定を期するために、われわれかねてからの要望が少しでも達成することが出来れば結構なことと思う。

一方昨春来暴落を招来した和牛価格変動の影響が昭和31年度の生産面に大きな支障を齎すのではないかと憂慮されていた役肉用牛総頭数については2月1日現在272万頭と前年比約8万頭増となり農宝としての堅実さを示してくれた。このことは反面近来における本邦食肉需要の異常な進展が大きな役割を果しているものと考えられ屠殺頭数の増大は消費大層の拡大を顕著に物語っているものといえよう。

本年こそは動物蛋白供給源としてその大宗をなす和牛が、真に生産の合理化を図り肉質の改良を促進して畜産物需給の原動力にならねばいけないと考える。

流通面についても余剰農産物見返円による枝肉取引市場を設置し肉取引の合理化が推進されつつあるがこの点については、貴県の加入しておられる全国和牛農協連を通じて適正な共同出荷態勢を整る等の線を基盤として、取引市場に生産者の足がかりをかためていかねばならぬであろう。